

iPDN Lectures

Chapter 1 PEG

2 適応と禁忌

PEG適応

1. 嚥下・摂食障害
2. 繰り返す誤嚥性肺炎
3. 炎症性腸疾患
4. 減圧治療
5. その他の特殊治療

1. 嚥下・摂食障害

- 脳血管障害、認知症などのため、自発的に摂食できない
- 神経・筋疾患などのため、摂食不能または困難
- 頭部、顔面外傷のため摂食困難
- 喉咽頭、食道、胃噴門部狭窄
- 食道穿孔

2. 繰り返す誤嚥性肺炎

- 摂食できるが誤嚥を繰り返す
- 経鼻胃管留置に伴う誤嚥

3. 炎症性腸疾患

- 長期経腸栄養を必要とする炎症性腸疾患、とくにクローン病患者

4. 減圧治療

- 幽門狭窄
- 上部小腸閉塞

5. その他の特殊治療

PEGの適応に関するガイドライン（US）

PEGが最も有益と考えられる

- 正常の精神状態を有する嚥下障害
- 減圧ドレナージ目的
- 治療中の頭頸部癌症例

PEGがオプションの一つと考えられる対象

- 代謝亢進・食欲不振状態（悪性腫瘍など）
- 精神障害を有する摂食障害（認知症など）
- 非可逆的な精神・身体障害（植物状態）

PEGの禁忌

絶対的禁忌

相対的禁忌

絶対的禁忌

- 通常の内視鏡検査の絶対禁忌
- 内視鏡が通過不可能な咽頭・食道狭窄
- 胃前壁を腹壁に近接できない
- 補正できない出血傾向
- 消化管閉塞（減圧ドレナージ目的以外の場合）

相対的禁忌 (1)

- 大量の腹水貯留
- 極度の肥満
- 胃の腫瘍性病変や急性胃粘膜病変
- 横隔膜ヘルニア
- 出血傾向
- 妊娠
- 門脈圧亢進

相対的禁忌 (2)

- 腹膜透析
- 癌性腹膜炎
- 全身状態不良
- 生命予後不良
- 胃手術既往
- 説明と同意が得られない

医学的なPEG適応のアルゴリズム

生命予後が1ヵ月以上ある

↓ YES

PEGに耐えられる全身状態である

↓ YES

何らかの理由で経口摂取が出来ないが
正常な消化吸収機能を維持している

↓ YES

経腸栄養を行う期間が4週間以上ある

↓ YES

PEGが最も適したルート造設法である

↓ YES

PEG適応

NO

NO

NO

NO

NO

PEG不適応

倫理面を考慮したPEG適応のアルゴリズム

患者に健全な自己判断能力があり意思表示ができる

YES

NO

発症前に患者の意思表示がある

YES

NO

患者がPEGを望む

代理人がPEGを望む

YES

NO

YES

NO

PEGが医学的に有効である

NO

YES

PEG適応

PEG不適応

PEG適応の留意点

- 事前説明の重要性
- 疾患・目的別ガイドラインの作成
- 患者の意思の尊重
- 栄養補給の見直し、及び中止